

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04]

親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05]

成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発,測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜市立大学附属病院 児童精神科)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-06]

Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon（発,測）

A Randomized Controlled Trial

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04] 親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

【背景】近年、スポーツ活動の促進要因の1つとして「フィジカルリテラシー」が国内外で注目されている。我が国においては、第3期スポーツ基本計画の施策目標にフィジカルリテラシーが盛り込まれた。保護者のフィジカルリテラシーに着目した検討では、子どもの運動・スポーツ環境との関連性が示されている。さらに、自分の子どもと保護者自身とを重ね合わせる「スポーツ同一化」も子どものスポーツ活動に影響を与えていると考えられている。そこで本研究では、スポーツに取り組む子どもを持つ保護者のフィジカルリテラシーとスポーツ同一化に着目し、子どものスポーツ活動における保護者の役割について明らかにすることを目的とした。【方法】対象者は神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者とした。調査項目は日本スポーツ協会が開発した身体、心理、社会、認知的の4領域に分類された「フィジカルリテラシー尺度」と、「スポーツ同一化尺度」(井梅ほか, 2017)を採用した。【結果および考察】「スポーツの自信の有無」からみたフィジカルリテラシーの比較では、身体的領域のみ得意群が有意に高かった。スポーツ同一化の比較では得意群が有意に高かった。「スポーツの嗜好性」からみたフィジカルリテラシーの比較では、4領域において得意群が有意に高かった。「子どもとのスポーツの会話頻度」からみた比較では、4領域すべてに有意な差は認められなかった。スポーツ同一化の比較では、よく話す群が有意に高かった。フィジカルリテラシーの4領域とスポーツ同一化との因子間では、社会的領域および認知的領域とスポーツ同一化は有意な負の相関関係を認めた。これらの結果から、保護者のフィジカルリテラシーはスポーツに対する自信や嗜好性と関連していた。保護者のフィジカルリテラシーおよびスポーツ同一化は子どものスポーツ環境に影響する要因の一つとなる可能性が示された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05] 成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発、測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜国立大学附属病院 児童精神科)

【背景】Physical Literacy (PL) とは、生涯にわたって身体活動や運動に取り組むための動機、自信、身体的能力、知識および理解である (IPLA, 2017)。近年、PLの醸成は身体活動習慣の獲得に貢献することが示唆されている。一方で、PLは身体活動習慣を介して、生活の質 (QOL) に関与する可能性が考えられるが、これらの関係は不明である。【目的】本研究では、成人を対象にPL、身体活動、および健康関連QOLの関係を明らかにすることを目的とした。【方法】本研究では、対象者はインターネット調査会社に登録している18歳から64歳までのモニターでから募集した。性・年齢ごとに均等割り付けを行い有効な回答が得られた成人男女940人を分析対象とした。日本語版 PL4L及び日本語版 WHOQOL-26 尺度を用いて PL および QOL を得点化した。PL4L は身体領域、感情領域、認知領域、社会領域の4領域から構成され、領域ごとの得点率とこれらを平均した PL 得点を算出した。身体活動は1週間あたりの身体活動時間(分)及び行動変容ステージを用いて評価した。統計解析には共分散構造分析を用い、PL、身体活動、QOLを潜在変数と仮定し、3変数間の関連性における標準化偏回帰係数 (β [95%信頼区間]) を算出した。【結果】モデルの適合度は良好であった (CMIN/DF= 6.336、RMSEA=0.075、CFI= 0.963、GFI=0.958、AGFI=0.928)。PLはQOLと直接的に関連していた ($\beta=0.332$ [0.196,0.439])。一方、PLは身体活動と関連しており ($\beta=0.598$ [0.481,0.731])、身体活動はQOLとも関連していた ($\beta=0.245$ [0.122,0.401])。【結論】成人において、PLはQOLに直接的および身体活動を介して関連することが示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

16:10 ~ 16:30

**[生涯スポーツ-A-06] Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon (発,測)
A Randomized Controlled Trial**

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

Background: The dawn phenomenon (DP), characterized by abnormal early-morning glucose fluctuations, poses a serious risk to individuals with T2D.

Methods: The 110 recruited individuals were randomized into three exercise groups and a control group. Each mini-cycle of 5 days was separated by 1 day (G1), 2 days (G2), 3 days (G3), and a control group (GC), respectively. Nine mini-cycles of intervention per exercise group.

Results: The final sample size was 85. Compared with baseline and GC, all three groups showed a decrease ($P < 0.01$). Differences between groups were also observed ($P < 0.01$). DP improved in cycles 7, 8, and 9. G1 exhibited the greatest change in cycle 3, peaking earlier and higher than G2 and G3. From T4 to T9, G1 showed a decreasing trend.

Conclusions: Periodic exercise effectively attenuates DP in T2D, with shorter intervals yielding earlier and greater glycemic improvements.